

アメリカの時代と天然ガス産業

第2次大戦の勝利は戦場だけでなく、アメリカ国内でも前例のない政府の努力によりもたらされたものであった。1939年から1945年の間に生産はほぼ2倍になった。戦時体制のなかでアルミニウムの生産設備は9倍に拡大し、マグネシウム産業が生まれ、工作機械生産は7倍になった。鉄鋼生産は数年前の世界の総生産に匹敵した。戦争で大恐慌から抜け出し、社会の脅威だった大量失業に終止符が打たれた。戦争が終結したときアメリカは大変貌を遂げていた。次の25年間世界を支配した超経済大国が誕生したのである。

第2次大戦において政府の戦時緊急機関がガスの生産と輸送能力の増大を求めるに従い、アメリカの天然ガス産業は再び活気づけられた。1920年代に企業家が中西部の大都市と中部大陸の生産を連結した産業の成長パターンと同じように、戦争は北東地域の戦時工業に燃料を届けるためガルフ沿岸のガス田から延長する長距離パイプラインの建設を促進した。

戦争は鋼、アルミニウム、高オクタンガソリン、合成ゴム、化学薬品、爆薬の製造のためそうして発電のほか工業用熱源として天然ガスとその副産物（エタン、プロパン、ブタン等）の空前の量を必要とした。その上住居用需要も急成長する軍と国内戦時関連労働力を収容するため新しく建てられた住宅の加熱のため増加した。戦時需要に応じ天然ガスの生産は55%増加した。

1940年代の初期テネシーガスラインがアパラチア市場と南西埋蔵量を結んだ。しかしこのパイプラインは巨大な北東大都市の中心には届かなかった。大戦の末期、2つの石油パイプラインが、東テキサスの油田地帯からペンシルバニア州フェニックスビル、とニュージャージー州のリンデンまで敷設された。これらの“戦時緊急ライン”は戦後のガス産業の発展を助けることになった。

戦争と次の20年を通じ天然ガス産業は拡張を続けた。最も重要なパイプラインの建設と公共事業政策であった。新しいライン計画は南西部から西部、中西部そして北東市場に向かって進む主要な長距離ラインを含んだ。急速な産業の成長は厳重な規制コントロールの必要を呼び起こした。しかしガスの豊富なこの時代にはガス産業は規制にも拘らず成長した。安定した統制された価格は消費者のガス購入を保証した。

(1) 連邦戦時計画とアパラチア地域の天然ガス供給

アパラチア地域はアメリカの戦時生産センターであった。ピッツバーグ、ヤングスタウン、ウィーリング地域は、大量の天然ガスを必要とするゴムと化学プラントの他、数百の製鋼所、冶金工場を持っていた。天然ガスは一定の温度で燃焼し、高品質の製品をつくるため、特別重要な燃料であった。アパラチア地域の約660の工場は天然ガスの24Bcf/年平均を必要とし、地域としてのアパラチアは300Bcf/年のガスを必要とし、それらの約半分は工業用消費が占めた。戦争のエネルギー需要はアパラチアのガス埋蔵量にさらに一層の圧力を負わせた。

アパラチアの天然ガスの生産は1917年に552Bcf/年でピークに達した。これはアメリカの生産の約63%を占めた。これは1930年代の終わりには約16%に減少した。これは南西部に於ける比例した生産の増加のほ